

# 小学校音楽科音楽づくりの活動における「枠組み」 設定の方法と構成要素

— 12の実践事例分析からの考察 —

西田 治<sup>1</sup> 高以良 智也<sup>2</sup>

## Methods and Components of Developing a Framework for Music-Making Activities in Elementary School Music Courses: A Discussion based on Twelve Case Analyses

Osamu NISHIDA, Tomoya TAKAIRA

### 1. 研究の問いと問題の所在

小学校音楽科における音楽づくりの活動の指導のポイントとして、思いつくまま自由につくるのではなく、何らかの枠組み（ルール、制限、約束事）を設けて活動することの重要性は先行研究によってすでに指摘されてきた。

坪能由紀子（2018）は、音楽づくりの活動において、「一定の枠組み（音楽の仕組み）をもとにつくることにより、音楽の構造を理解することにつながる」と述べたうえで、「[即興]をベースとし、「一定の枠組み」（音楽の仕組み）を教師が（または子どもたち同士で）提示することが大切である」とする（p.83）。また、音楽づくりで重要なのは「[一定の枠組み]、すなわち〔共通事項〕「イ」にある「反復」や「呼びかけとこたえ」などの「音楽の仕組み」である」と述べ、「音楽を作ることは、「音を音楽に構成する」ことに他ならず、その手立てとなるのが「音楽の仕組み」である」と述べる。併せて、歌などの合間に歌詞とつながりのある音を入れたり、物語あるいは具体的なイメージに合わせて音を工夫するといった活動では、子どもたちの作りだしたものは音楽というより音あるいは効果音でしかない場合が多いと指摘し、そうならないためにも「音楽の仕組み」が重要だと指摘する（p.84）。

同様に津田正之（2011）も、音楽づくりの授業において、擬音や効果音的な表現にとどまっている、時間をかける割には表現が深まらない、といった状況はないだろうかと疑問を投げかけ、その状況を打破するための手掛かりとして「音楽の仕組み」をあげている（pp. 50-51）。また、津田（2011）は、音楽づくりの授業を充実するための視点として、「[音楽的な約束事]を設定する」が必要であり、それは指導のねらいを踏まえて、音楽づくりのための発想を引き出すことができるようなものであるべきと示唆している（pp.52-53）。

学習指導要領の改訂によって、音楽科においても「知識」の重要性が再認識される今日

1 長崎大学教育学部

2 長崎大学大学院教育学研究科 教職実践専攻教科授業実践コース1年

にあつては、音楽づくりの活動において「音楽の仕組み」を適宜設定し、それを使いながら音楽を作ること、「音楽の仕組み」を感性と結びつけた知識として獲得することの重要性はさらに増していると言えよう。

また、知識獲得の面からだけでなく、何かを作り出す際には、枠組みが重要であることが指摘されている。芸術認知科学を専門とする齋藤亜矢(2017)は、何の枠組みも与えられず、白紙の画用紙に自由に描いてくださいと言われると、子どもでもアンパンマンや女の子などのお決まりの絵になりがちであるが、画用紙に図形が書いてあったりするとそれを何かに見立てて面白い絵がでてくるとし、自由に表現するための枠組みの重要性について言及している。

以上の先行研究を踏まえると、音を音楽に構成するため、また、お決まりのパターンや思い付きに頼らず、思いや意図をもってつくるためにも、音楽づくりの活動では枠組みの設定が重要になることが確認される。

音楽づくりの活動における枠組みの重要性に関する先行研究としては、先に挙げたもの以外に明道春奈(2015)が「環境と制約」について自らの小学校2年生対象の授業実践をもとに考察したもの、木村充子(2011)が保育者養成課程における実践事例をもとに創造的な営みにおける制約の重要性について示唆するもの、矢吹雄介(2015)が「音楽の約束事」や「ルール」「制約」を設けることにより、児童が過度に難しさを感じることなく音楽づくりの学習を進められるようになることを示唆したものなどがあるが、枠組みの提示方法や構成要素に焦点を絞り検討しているものは管見の限り見つからなかった。よって本稿では、音楽づくりにおける枠組みの効果的な提示方法および構成要素とは何か、を問いとして設定し考察を進め、音楽づくりの授業デザインの手掛かりとなるものを提供することを目的とする。なお、本稿で「枠組み」として取り扱うのは、子どもたちが音を音楽へと構成する音楽づくりを行う際の手掛かりとして機能しているもの全てとする。

問いの検証は、優れた実践事例において、どのような事柄が枠組みとして機能しているのか、また、それらがどのような流れで提示されるのかを分析し、それらの共通点を整理することによって行う。今回は、優れた事例として文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター制作のDVD『小学校音楽映像指導資料 楽しく実践できる 音楽づくり授業ガイド』に収録されている12の事例(低学年4事例、中学年4事例、高学年4事例)を取り上げる<sup>3</sup>。

## 2. 事例分析

12の事例について、DVDに収められている授業場面を対象とし分析を行う。各表の左側「活動内容」は、DVD中において示されているものであり、右側の「主な活動と枠組み」は筆者らによって協議・検討し書き起こしたものである。

### (1) 低学年

#### ○事例1：第1学年「耳をすましてつくりよう一身の回りの音の面白さを声で表す」

本事例は、全3時間で構成され、DVDには第2時および第3時が収められている。

3 事例分析の対象とすることについては、国立教育政策研究所教育課程研究センターの許可を得ている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第2時	自然や生活の中にある音を聴き取り、その面白さに気づいて声で表し、音遊びをする。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自がお気に入りの音を探し擬音語で表す。</li> <li>・一人ずつ擬音語を紹介し、全員で真似をする。</li> <li>・全員でリレー形式で演奏し音遊びをする。 →1人ずつ2回繰り返して唱える。 →1回目と2回目で変化させる。</li> </ul>
第3時	声の出し方を工夫し、反復や「問いと答え」の表現を楽しみながら、簡単な音楽をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3人グループでリレーにより即興演奏する。</li> <li>・一人がコールして、クラス全員がレスポンスする。</li> <li>・同じ擬音語を3回繰り返すが、異なる表し方で表現する。教師による例示で音の高さ、長さ、速さの工夫に気づかせる。ホワイトボードには、<u>リレー</u>、<u>まねっこ</u>、<u>ひとり／みんな</u>、<u>おはなし</u>というカードが張られており、つくる時の約束を明示。</li> <li>・3人グループで音楽づくり。教師が介入し、どのような表現にするかを問いかけたり、確認したりする。</li> <li>・中間発表。速さを工夫しているグループを取り上げ、「<u>はやさ</u>」「<u>たかさ</u>」「<u>つよさ</u>」という工夫の観点を提示。</li> <li>・各グループによる音楽づくり。</li> <li>・グループごとによる発表。教師による価値づけ。</li> </ul>

活動の流れは、リレーやまねといった枠組みの中で即興的な表現を行うことからスタートし、それらの枠組みをつかった作品づくりに移行するものである。また、作品を大まかにつくった段階で、工夫の観点として音楽の要素（はやさ、たかさ、つよさ）を追加して提示しており、これらも音楽づくりの枠組みとして機能していた。加えて、教師が「先生がやってみようかな」と音高を変えた工夫を例示したり、「こんなふうな言い方もあるよ」と別の工夫を例示したりする場面も見受けられ、それらは枠組みの有効な提示方法と考えられた。指導形態は、全体で教師主導による即興的な音遊びからグループごとの音楽づくりに移行する形であった。

### ○事例2：第1学年「[「といかけあうた」をたのしもう]

本題材は、全3時間で構成され、DVDには第2時及び第3時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第2時	二人組で、「といかけあうた」の答え方を工夫する。(音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ひとやまこえて」の歌唱。</li> <li>・「ひとやまこえて」の応答部分をもとに、ペアで<u>問いと答え</u>の音楽をつくる音あそび。その際に、<u>音の長短</u>について工夫するように促す。教師は介入し表現の意図を明確にさせる。</li> <li>・全体で発表。<u>音の長短</u>の工夫について取り上げることで、表現の工夫の観点を再確認する。</li> </ul>

第 3 時	一人二役で、だれかと私が「といかけあううた」をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人二役で問いかけ合う歌を作る。</li> <li>・教師が完成イメージを例示。</li> <li>・先ずは問いかけ合う歌を作り、その後、工夫の観点として顔の表情、声の感じも工夫するように促す。</li> <li>・一人ずつ全体で発表する。教師は問いと答えになっていることを児童に確認する。</li> </ul>
-------------	--	--

活動の流れは、第2時では「ひとやまこえて」の歌唱をしたのち、問いと答えの仕組みおよび音の長短を工夫の観点として設定したペアによる音楽づくりを、第3時では一人二役で問いと答えのある歌をつくり発表するものである。指導形態は、全体で歌唱、次にペアでの音楽づくり、最終的には一人二役で音楽づくりを行う流れであった。

### ○事例3：第2学年 「といとこたえをたのしもう—手作り楽器を使って—」

本題材は、全5時間で構成され、DVDには第3時及び第4時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第 3 時	身の回りの音に関心をもち、「問いと答え」を意識した音の出し方を工夫して音遊びをする。(音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師がつくった紙コップの楽器を配布し、<u>リレー</u>、仲間探し、教師と<u>コールアンドレスポンス</u>を行う(模倣)。</li> <li>・まねしちゃだめよゲーム(問いと答え)。</li> <li>・1人8拍ずつ即興的な表現をリレー(8拍めは休符)。</li> <li>・教師と子どもで、<u>問いと答え</u>、<u>模倣</u>をつかって音で会話する例示を行い、その後、ペアで行う。</li> </ul>
第 4 時	グループで「問いと答え」の表現を工夫して、簡単なリズムの音楽をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まねっこ(模倣)、おしゃべり(問いと答え)、リレー、いっしょのカードから<u>3枚</u>を使って音楽づくりを行う。同じカードを二枚使ってもよい。1グループ4人。</li> <li>・教師による介入→「どこで終わるか決めないと」。</li> <li>・抽出グループによる中間発表。音楽の仕組みを確認。</li> <li>・グループごとの活動。「<u>どう終わらせるかがとても大事</u>」など教師の介入・助言あり。</li> <li>・グループごとの発表。次回の発表会の予告。</li> </ul>

活動の流れは、第1時の歌唱(おおブレネリ)、第2時の鑑賞(ねこの二重唱)で学んだ「問いと答え」を枠組みとして設定し、音楽づくりに入るというものであった。音楽づくりの場面では、先ずは全体で教師主導によりリレー、まね、おしゃべりを体験し、その後、それらの枠組みをつかってグループごとに音楽づくりを行っていた。グループ活動の場面では、「どう終わるか決めないと」といった教師の介入・助言がみられ、それが枠組みとして機能していたと考えられる。指導形態は、教師主導による全体での音遊びやリレー形式での即興的な表現から4人1グループでの音楽づくりに移行する流れであった。

### ○事例4：第2学年「くだものリズムでつくるう一言葉のリズムを工夫して—」

本題材は、全4時間で構成され、DVDには第1時、第3時、第4時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第1時	○言葉のリズムの面白さを感じ取り、声の高低や強弱、速度を工夫して音遊びを楽しむ。 (音楽づくり)	・円になり、「バナナ」と言いながらシェイカーを右隣へパス。教師が声の強弱・高低、 <u>言葉のリズム</u> を変化させた手本を示すことで工夫を促す。 ・「バナナ」のリズムや飾り言葉を工夫して全員でコールアンドレスポンス。音の長短、強弱に気づかせる。 ・様々な表現でバナナという言葉の繰り返す。 ・バナナ以外の果物で同様の音あそびを行う。
第3時	○声の高低、リズム、強弱や速度を工夫しながら、グループや反復や「問いと答え」を生かした簡単な音楽をつくる。 (音楽づくり)	・1グループ4人で、音楽(くだものリズム)をつくる。各グループに配られたボードには文字カードが貼られており、それらを組み合わせて音楽づくりを行うルール設定。 (文字カード) <u>テーマ、くりかえし、といとこたえ、二人組、だんだん強く、だんだん弱く、1人と1人、1人とみんな、みんなで</u> ・グループごとに作る活動。教師による介入あり。 ・抽出グループによる中間発表。教師は <u>リズムの重ね方、速さ</u> などの工夫に気づくように促している。
第4時	○声の高低、リズム、強弱や速度を工夫しながら、グループで反復や「問いと答え」を生かした簡単な音楽をつくる。 (音楽づくり)	・1つのグループが発表。それに対し、はじめ、なか、おわりの音楽の構成を提案したり、 <u>終わり方の工夫</u> を加えるよう具体的な例(みんなで一緒に言葉を言って終わる、だんだん小さくなって最後大きくなって終わる)を示し、工夫の観点を確認。 ・各グループによる音楽づくり。教師による介入。 ・各グループ工夫したところを説明した後に発表。教師による価値づけ。

活動の流れは、第1・2時で教師主導で言葉のリズム、音高、強弱、反復などをつかった音あそびを行い、第3・4時では、音遊あそびで獲得した枠組みを使って音楽づくりをするというものである。発表場面では、教師が提案することでその内容が枠組みとして機能している様子が見られた。指導形態は、全体での即興的な音遊びから、ペアでの音遊び、最終的にはグループでの音楽づくりに移行している。

## (2) 中学年

### ○事例5：第3学年「リコーダーでせんりつをつくろうーソラシの音を使ってー」

本題材は、全4時間で構成され、DVDには第3時及び第4時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第3時	○グループで試しながら旋律をつなぎ、反復や「問いと答え」を生かして音楽をつくる。	・「 <u>まねのリレー</u> 」を全員で行う(ソラシを使って一人が演奏して、全員が真似る)。

	(音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「会話」を2人組で行う。一人が呼びかけ、もう一人が答えとなる旋律を即興演奏する(問いと答え)。</li> <li>・ソラシと以下の仕組みを使って、4人組でつくる。</li> <li>・「まね」(反復), 「会話」(呼びかけと答え), 「サンドイッチ」(ロンド), 「リレー」</li> <li>・中間発表: 各グループがどのような仕組みを使っているかを確認。</li> </ul>
第4時	○終わり方や旋律のつなぎ方を工夫して、まとまりのある音楽をつくる。(音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>終わり方</u>の工夫を行う。</li> <li>・「みんなで」「ソでおわる」「ゆっくりおわる」の3点を提示。</li> <li>・グループごとに音楽づくりをしている場面で、サンドイッチ-まね-サンドイッチのA-B-Aで構成しているグループに「踊る子ねこ」を例に出し、<u>はじめとおわりの基本の旋律は同じほうが良い</u>ことを助言。</li> <li>・グループごとに発表。</li> </ul>

活動の流れは、まね(反復)や会話(問いと答え)を使った即興的な表現を実施したのち、それらに加えてサンドイッチ(ロンド)という枠組みを加えて、グループでの音楽づくりに移行していくものであった。グループによる音楽づくりでは、大まか作品ができたタイミングで、終わり方として「みんなで」「ソでおわる」「ゆっくりおわる」といった枠組みが加えて提示されていた。また、本事例も教師による助言が枠組みとして機能している場面がみられた。指導形態は、教師主導による全体やペアの活動の後にグループごとの音楽づくりに移行していた。

#### ○事例6: 第3・4学年(複式)「図形の楽ふでつくろうー音楽の形を考えてー」

本題材は、全3時間で構成され、DVDには全時間の概要が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第1時	○絵から感じる音を声で表したり、打楽器の音を聴いて声や図形で表したりする。(音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵を見て声を出す。ギザギザの絵⇒ギザギザの大きさに合わせて強弱をつけるなど(図形のイメージ)。</li> <li>・教師が出した声を絵に描き表現する。</li> <li>・各自がトライアングル、クラベス、タンバリンの楽器の音色を絵に描き、描いた絵について説明する。</li> <li>・図形楽譜の良さを確認する。</li> </ul>
第2時	○図形に合う音の出し方を工夫したり、図形を組み合わせたリして、即興的に表現する。(音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4枚の図形楽譜(大きな円、小さな円、クレッシェンドのような三角形)を使って、音楽をつくる。</li> <li>・使う楽器を材質で分け、音を確かめて楽器を選ぶ(音色)。</li> <li>・個人で音楽づくり(即興表現)を行い、全体の前で発表。</li> </ul>

第3時	○打楽器の組み合わせによる響きを聴き合いながら、演奏の順序や音の重ね方を工夫し、友達と音楽をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3人と4人のグループに分かれ音楽をつくる、つくる際の枠組みとして以下4点が提示されている。</li> <li>・最大で8枚の図形楽譜を使うこと、「はじめ」「なか」「おわり」を考えること、演奏の形（一人で、二人で、みんな、順に重ねて、一斉に重ねて、みんなでやめて）を考えることを音楽づくりの約束として設定。</li> <li>・中間発表でよさと見直すべき点を考え、再度グループで音楽づくりを行う。</li> <li>・中間発表と変えたところを説明して発表。</li> </ul>
-----	---	--

活動の流れは、図形楽譜の良さを確認したのち、4枚の図形楽譜を使った即興的な表現をし、それらをつかかってグループごとに音楽づくりを行うものであった。指導形態は、教師主導による全体での即興的な表現から4枚の図形楽譜を用いた個人の音楽づくり。即興表現、グループによる音楽づくりへと移行していくものであった。

○事例7：第3・4学年（複式）「打楽器でつくろうーリズムアンサンブルをつくるー」

本題材は、全4時間で構成され、DVDには第1時～第3時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第1時	○打楽器の音色の違いを楽しみながら、即興的にリズムをつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「まねのリレー」=円になり、教師と同じリズムを一人一人が様々な打楽器で叩く。</li> <li>・「異なるリズムのリレー」=円になり、それぞれ異なるリズムを一人一人が即興的に打楽器で演奏する。</li> <li>・他にどのような方法でリズムをつなぐことができるか考える。児童からは「追いかけっこ（ずらして演奏する）」が出され、教師から「順に重ねる」、「順に減らす」、「まね」が出された。</li> </ul>
第2時	○打楽器の音色の特徴を生かし、その組み合わせや重ね方を試しながら、音楽をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人グループによる音楽づくりに先立ち、音色、音高、音の響きの違いなどの観点からグループごとに楽器を選ぶ。</li> <li>・前時で出てきたリズムのつなぎ方を意識してリズムアンサンブルをつくる。</li> <li>・教師が「～してもいいと思う」と提案することで表現の幅を広げている。</li> <li>・抽出グループによる中間発表。表現のアイディアの共有。</li> </ul>
第3時	○リズムを重ね合わせ、反復や「問いと答え」、変化を生かしてリズムアンサンブルの中心となる部分をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめ、中、終わりの中の部分を作ることと楽器の重ね方を再度確認してからグループごとに音楽づくり。教師が助言しながら介入。</li> <li>・中間発表。他グループの演奏を聴き、表現のよさを発表する。教師による価値づけ。</li> <li>・次回ははじめとおわりをつくることを予告。</li> </ul>

活動の流れは、まねや異なる音のリレーなどの即興的な表現から、はじめ、なか、おわり、反復や問いと答え、変化といった音楽の仕組みを枠組みとして設定した音楽づくりに移行するものであった。指導形態は、全体での即興的な表現からグループごとの音楽づくりへと移行する流れである。本事例も教師による「～してもいいと思う」という提案が行われており、それが枠組みとして機能している様子がみられた。指導形態は、教師主導による全体での即興的な表現から、4人グループでの音楽づくりへと移行している。

#### ○事例8：第4学年「日本の民ように親しもう—自分たちの「生活のうた」をつくる—」

本題材は、全6時間で構成され、DVDには第4時及び第5時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第4時	○民謡の音階を使って、言葉の抑揚や歌詞に込めた思いにふさわしい旋律をつくる。 (音楽づくり)	・前時に国語科で考えた「生活のうた(7語, 5語, 7語, 5語の構成)」に旋律をつける活動。音楽づくりでは、以下3点の「せんりつづくりのポイント」を踏まえて行う。 言葉：言葉の雰囲気を大切に作る。 音階：民謡音階を使う。 始まりの音, 終わりの音はミを使う。 拍の流れ：手拍子に合わせてつくる。 ・1グループ(5人)ごとに1台の電子オルガンを使用しでの音楽づくり。 ・中間発表。「くりかえし」が歌の作りやすさのポイントになることを確認。 ・再びグループごとの音楽づくり。 ・中間発表。変えた部分を説明してから演奏。
第5時	○合いの手やかけ声, 間, ゆれ, 手拍子などを工夫して、民謡風のうたをつくる。(音楽づくり) ※民謡のゲストティーチャーを招いての授業。	・全グループ, 前時につくった歌を発表。 ・以下の民謡らしくするポイントを提示する。 ① <u>合いの手</u> を入れる。②のばすところにゆれを入れる。③母音を意識する。④口を大きくあける。⑤おなかから声を出す。⑥動作を入れる。 ・教師がつくった歌(具体的なモデル)から, 主な節と重なる旋律(くり返しを使った旋律), 合いの手などに気づかせる。 ・くり返しや <u>合いの手</u> をいれることで民謡らしくなることを確認し, グループごとの音楽づくり。音楽科教員とゲストティーチャーの介入あり。 ・グループごとの発表。

活動の流れは、第1時の鑑賞で日本の民謡を聴き比べ特徴や良さを感じ取り、第2・3時の歌唱の活動で民謡らしい歌い方を工夫する活動が行われ、国語科の授業において歌詞作りが行われており、第4・5時の音楽づくりの活動場面は、国語科でつくった歌詞にミソラシレミという民謡音階を用いてグループごとに旋律づくりを行うものであった。第6時は再び鑑賞の活動となっている。指導形態は、教師が歌作りのポイントを全体に示した



後は、グループでの音楽づくりに移行するものであった。

### (3) 高学年

#### ○事例9：第5学年

「ボディーパーカッションでつくろう～反復のリズムを重ねてカノンの音楽をつくる」

本題材は、全4時間で構成され、DVDには第1時及び第3時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第1時	○体から出る様々な音を試しながら、カノンの仕組みを使って、即興的に音楽をつくる。 (音楽づくり)	・既習曲でカノンの知識獲得。 ・全員による手拍子回しでカノンの体験した後、8人グループでいかにカノンを演奏するかの例示。 ・8人グループでカノンの仕組みを使った音楽づくり。「音楽づくりの約束」として、以下5点提示。 ・長さ 1.5～2分 ・拍子は自由 ・「はじめ→中→おわり」でつくる ・「中」でカノンの仕組みを使う ・リズムが進む方向は自由 ・留意点として、「すぐにリズムを変えない」、「細かいリズムと大きなリズムの組み合わせが成功しやすい」ことを確認。
第3時	○始め方や終わり方を工夫しながら、カノンを生かした音楽をつくり上げる。 (音楽づくり)	・グループごとに音楽づくり。教師からの問いかけと提案「 <u>終わり方はどうする?</u> 」「例えば端の人が大きなジェスチャーで手拍子を打つとか」。 ・各グループの発表。教師による価値づけ。

活動の流れは、器楽の既習曲でカノンの知識を獲得し、即興的な表現によってカノンを体験し、グループごとの音楽づくりに移行するものであった。音楽づくりの場面では、教師の提案が枠組みとして機能している様子が見られた。指導形態は、全体での即興的な遊び表現からグループでの音楽づくりに移行する流れである。

#### ○事例10：第5学年 「この音楽に親しもうー日本の四季を表した音楽をつくるー」

本題材は、全6時間で構成され、DVDには第3時及び第4時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第3・4時	○異なる調子を試すなどして、表したい表現のイメージを膨らませ、二人組で「問いと答え」や間を生かした箏の音楽をつくる。(音楽づくり)	第3時 ・板書「工夫のポイント」 <u>調子のちがい：楽調子・雲井調子</u> <u>問いと答え、間</u> →本時は調子の違いに焦点をあてて活動。

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2人で一面の箏を使って、「<u>冬の雪</u>」などのテーマを設定し、<u>楽調子・雲井調子</u>のいずれかを使って音楽づくりを行い図形楽譜に書き留め、作製した図形楽譜を異なる調子で演奏し、違いを感じ取る。</li> <li>・ 何組かのペアが発表し、違いを感じ取る。</li> </ul> <p>第4時</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師による作品を聴取し、ポイントのどれに当てはまるかを問い、<u>間</u>、<u>問いと答え</u>などの仕組みを確認。</li> <li>・ 各ペアで「<u>夏の台風</u>」など、<u>テーマを設定し</u>、<u>調子</u>を選んで音楽づくりを行う。</li> <li>・ 曲の終わり方で悩んでいるグループを取り上げ、<u>曲の終わり方</u>についてピチカードを例として共有。</li> <li>・ いくつかのペアのみ発表。次回、全てのペアが発表することを予告。</li> </ul>
--	--	--

活動の流れは、鑑賞や歌唱で、調子、問いと答え、間を学び、それを音楽づくりの枠組みとして使用するというものであった。具体的には、「春の海」の鑑賞で箏と尺八のやり取りを図形楽譜としてあらわすことで、問いと答えの知識を獲得したり、「子もり歌」の歌唱では異なる調子で歌ったり箏で弾き比べることで調子について知識を獲得していることが示されていた。曲の終わり方に関する教師の提案が枠組みとして機能している様子が見られた。指導形態は、始終ペアによる活動で展開されていた。

#### ○事例11：第6学年

「声のアンサンブルをつくらうー発声や発音の仕方を生かして、声を重ねてつくるー」

本題材は、全5時間で構成され、DVDには第2時から第3時が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第2時	<p>○50音による声の組み合わせを試しながら、音楽の仕組みを生かして音楽をつくる。 (音楽づくり)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>ミを基準の音とし</u>、<u>ソを高い音</u>、<u>ドを低い音</u>として、教師の指揮に合わせて即興演奏する。</li> <li>・ 表現の素材となる発音や発声の仕方について解説があったのちに、グループに分かれて即興演奏。</li> <li>・ 小グループ(3~4人程度)による即興演奏を行った後、大グループ(9名程度)による音楽づくりに移行。</li> <li>・ 中間発表によって、音の高さ、発音に加えて、<u>4拍子の拍節感</u>を枠組みとして意識させる。</li> </ul>
第3・4時	<p>○強弱や速度、重ね方を工夫し、互いの表現を聴き合って自分たちの表現を高める。</p>	<p>第3時</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>音色</u>にも気を付けることを伝え、詩(様々な「あ」の表現に気づかせる)を朗読。</li> </ul>

	(音楽づくり) 第4時：映像なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「<u>基準の速さ</u>、<u>速い</u>、<u>ゆっくり</u>」,「<u>表情・音色</u>」,「<u>基準の強さ</u>、<u>強い</u>、<u>弱い</u>」を工夫のポイントとして新たに提示したのち、グループごとの音楽づくり。</li> <li>・中間発表。<u>構成</u>、<u>重ね方の工夫</u>を価値づけ。次への課題を明確化。</li> <li>・以下の「<u>2種類の重ねる方法</u>」を再提示し、現状でBがほとんどであることを確認。                      A: 1つのアイデアをみんなで重ねる                      B: 1人1人違うアイデアを重ねる</li> </ul>
--	---------------------	---

活動の流れは、音楽づくりの仕組みとなる事柄について、教師による解説の後、小グループでの即興、大グループでの音楽づくりに移行していくものであった。大グループでの活動では、中間発表を機会として、枠組みの確認、新たな提示が行われたり、教師による価値づけや助言が行われていた。はじめからすべての枠組みが提示されるのではなく、順次提示し、それを用いて作品を工夫していく流れであった。指導形態は、教師による全体指導から小グループ、大グループへと移行する流れである。

○事例12：第6学年

「くり返しのと音進行でつころうーI-IV-V-Iをもとに旋律を作るー」

本題材は、全4時間で構成され、DVDにはすべての時数が収められている。

時数	活動内容	主な活動と枠組み
第1時	○I-IV-V-Iの和声の響きを感じ取って、演奏したり、3つの音で即興的に旋律をつくったりする。 (器楽・音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トーンチャイムのI-IV-V-Iの和音奏をバックに鍵盤ハーモニカで「茶色のこびん」(既習曲)の旋律を演奏し、<u>I-IV-V-Iの和声進行を確認する</u>。</li> <li>・全員で円になり、同じ和音進行で<u>ドレミの3音を用いて1人2小節の即興演奏(トーンチャイムによる伴奏)</u>、次に<u>1人4小節の即興演奏(電子音源伴奏)</u>。異なる曲想の<u>電子音源伴奏で1人4小節で演奏</u>。</li> <li>・「茶色のこびん」の1カッコはミ、最後はドで終わることを確認し、<u>ドが終わった感じがすることを確認</u>。</li> </ul>
第2時	I-IV-V-Iの構成音を意識して、グループで即興的に旋律をつくる。 (音楽づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人グループで、<u>1人1小節、合計4小節の即興演奏(電子音源伴奏)</u>。</li> <li>・抽出グループによる発表。</li> </ul>
第3時	第3時 I-IV-V-Iの構成音をもとに、反復や変化を生かして、一人8小節のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旋律の作り方を教師が解説。</li> <li>・<u>8小節の旋律のパターンについて説明</u>。                      →A(4小節)-A'(4小節) もしくは A-B</li> </ul>

	のある旋律をつくる。 (音楽づくり)	・先ずは各自で4小節、和音の構成音から音を選んで音をつなげる。 ・リズムや音のつながりを工夫する。旋律のつなげ方の工夫として経過音や寄り道(非和声音)の説明したのち、各自による音楽づくり。 ・1名の児童が演奏発表。
第4時	第4時 同上	・児童による旋律の発表。教師による価値づけ。 ・「伴奏のノリがいい感じ。それに上手く合うように」という児童の発言→伴奏が枠組みとして機能。

活動の流れは、既習曲で枠組みとなる和声進行について知識を得て、全員が円になった状態で一人ずつ3音での即興演奏、グループごとの即興演奏の後、各自での音楽づくりに移行している。活動がスモールステップに分けられている点が特徴的であり、使用音についてはドレミのみ、構成音のみ、非和音も含めるといったように、段階的に使える音を増やしている。また、第4時の児童の発言にもあるように伴奏音源が旋律づくりに影響を与えている様子も見られた。指導形態は、教師主導で全員で一つの円になり一人ずつ即興でつくる、4人グループでつくる、一人で8小節を作るというように、全体から徐々に個に活動が移行するようにデザインされている。

### 3. 考察

枠組みの効果的な提示方法としては、共通するものとして以下5つがみられた。( )内は、該当する事例の番号を示している。

- ①音楽づくりの活動に入る前に歌唱、器楽、鑑賞の活動で枠組みとなる知識を獲得し、その知識を音楽づくりで活用するという題材構成あるいは授業接続(事例2, 3, 8, 9, 10, 12)。
- ②単純な(単一の)枠組みのみを使用した即興演奏・音楽づくりからスタートし、いくつかの枠組みを運用した音楽づくりへと発展させるという流れ(事例1, 3, 4, 5, 7, 9, 11, 12)。
- ③児童が個人やグループでつくる前に、教師主導で枠組みとなる知識を得たり活用したりするという流れ(事例1, 2, 3, 4, 9, 12)。
- ④中間発表を活用して、枠組みを確認したり、追加したりする流れ(事例1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12)。
- ⑤教師が手本や例をやって見せることで、枠組みの活用法用について具体的なイメージを抱かせる(事例1, 2, 3, 4, 8, 9, 10)。

①については、表現と鑑賞の往還だけでなく表現の中の歌唱、器楽、音楽づくりについても音楽の構造など(音楽の仕組み、要素)を共通項として関連付けられた学びがデザインされていることを示すものである。音楽づくりの活動に入る前に枠組みとして使用する

音楽の構造などについて学んでおくことの有効性を示すものである。

②については、即興的な音あそびから音楽づくりへ移行する流れを示している。音楽づくりの場面では、複数の音楽の構造などを活用していくことが求められるが、その前に使用する音楽の構造などを一つひとつ取り上げて音あそびをすることで、枠組みとなる音楽の構造などの活用方法について体験的に学ぶことの有用性を示すものである。これはまた、提示する枠組みが狭いほど、子どもたちの自由度は下がるが音楽はつくりやすくなるという事も示していると考えられる。例えば、ドレミの3音を使うのかド～シの7音を使うのかでは前者のほうが枠組みが狭く、子どもたちの自由度は下がる。しかし、枠組みを狭く設定したほうが、作りやすさは向上する。ここから、音楽づくりの導入段階では枠組みを狭く設定し作りやすさを優先させ、次第に枠組みを広くすることで自由度を確保していくという流れが有効であると考えられる。

③については、音楽の作り方を説明したのちに、すぐに児童自身、あるいは各グループの活動に入るのではなく、音楽の構造などの活用方法について、知的に理解したり、音あそびを通して体験的に理解する過程を経たうえで、児童たちが音楽づくりを行う流れを示している。つまり、始めから児童に丸投げせずに段階を踏んで枠組みを提示し、理解させることの有効性を示すものである。活動形態としては、全体→グループ→個人のように段階的に一緒に作る人数を減らしていったり、全体→グループもしくは全体→ペアのように移行する流れがみられた。

④については、合間に中間発表の場を設けることで、音楽づくりの枠組みについて確認したり、新たに提示したりすることを示している。これにより、使うべき音楽の構造などについて確認したり、強化したりすることができていた。ただし、中間発表は、それだけの役割ではなく、互いの表現の良さを発見することで相互に表現を高めていくという児童同士の学びあいの場としても重要な役割を果たしたり、教師の価値づけによって自信をもったり課題を見出したりしている様子が見て取れ、音楽づくりを行う際の重要な場面であることが併せて確認された。

⑤については、教師自身が作った作品を演奏し児童が聞くことを示すものである。それによって、児童たちは音楽の構造など使っていくかに音楽をつくるかのイメージをつかんでいる様子だった。つまり、音楽の構造などをどのように活用するかイメージを持たせるために有効な手立てだと言えよう。また、身近な存在である教師自身が作品を作り発表することは、それだけの意味にとどまらず、児童自身が「自分たちにも作れる・作ってみたい」という意識を持つことにも一役買っているのではないかと考察する。

以上5点については、一事例につきすべての点を踏まえているものではないため、授業をデザインする際の指標として適宜取り入れていくという活用方法が考えられる。

次に、事例から抽出した音楽づくりにおける枠組みの構成要素について考察する。抽出した構成要素は、分類すると、以下の図表1の左列に示すように、「音楽の骨格にかかわるもの」、「表現の工夫にかかわるもの」、「音楽の作りやすさにかかわるもの」3つに分類することができた。

図表1 【音楽づくりにおける枠組みの構成要素】

分類	事例から抽出された構成要素
音楽の骨格にかかわるもの (主として音楽の仕組み)	反復, 模倣, リレー, 問いと答え, ロンド, 合いの手, カノン, 変化, 楽曲の構成 (はじめ・なか・おわり, A-A'など), 重ね方 (一人で, 全員で, だんだん加わるなど), 終止の方法 (どのように作品を終えるか), 使用音 (音階, 開始音・終止音, 調子), 和声進行, 拍子, 歌づくりにおける歌詞
表現の工夫にかかわるもの (主として音楽の要素)	速度, 強弱, 音色, リズム (音の長短, 間を含む)
音楽の作りやすさにかかわるもの	曲の長さ (「1.5分から2分で作る」や小節数の指定など), 使う仕組み・要素の数を限定する (「3枚のカードで」などの指示), 伴奏のリズム・テンポ, 作品のテーマ (思いやイメージ), 図形楽譜における図のイメージ, 言葉を伴う活動における言葉のもつ音高, 教師による提案・助言, グループかペアか個人かという活動単位 (グループサイズ)

「音楽の骨格にかかわるもの」としては、坪能 (2018) が指摘するように主として音楽の仕組みが機能することが事例研究からも明らかであったが、それに加えて、音楽の要素として学習指導要領に明記されている音階なども音楽の骨格を構成する要素として機能していた。

「音楽の表現の工夫にかかわるもの」としては、主として音楽の要素が機能しており、音楽の骨格にかかわるのではなく表現を工夫したり豊かにするための要素として機能していた。ただし、「音楽の骨格にかかわるもの」と「音楽の表現の工夫にかかわるもの」は明確に区別されるものではなく、例えばリズムは、場合によって「音楽の表現の工夫にかかわるもの」に移動するというように流動性があるものと考えられる。

「音楽の作りやすさにかかわるもの」としては、曲の長さやカード枚数の制限、伴奏などが挙げられる。これらは必ずしも音楽づくりをする上で必須となる枠組みの構成要素ではないものの、子どもたちが限られた時間のなかで音楽づくりを行うための有効な手立てとなっていた。

また、一つの事例において3つの分類のうち、いずれかのみが設定されているのではなく、3つの分類それぞれに分布する形で構成要素が含まれていることが多かった。よって、音楽づくりの授業をデザインする際には、これら3つの分類それぞれについて教師が構成要素を明確に設定していくという活用方法が考えられる。

以上、音楽づくりの活動における枠組みの効果的な提示方法については一定の傾向を、構成要素についてはその一端を明らかにすることができたと考える。

これら事例から抽出された構成要素と提示方法は、音楽づくりの授業をデザインしたり省察したりする際の一つの指標として機能すると推察する。授業デザインの際に、効果的な提示方法を踏まえ授業の流れを作り、構成要素の3つの分類それぞれについて何を設定するかを明確にすることで、よりよい音楽づくりの授業を構成することができ、省察の際

にはうまくいかなかった点についてどの観点が不足していたかについて考察する手掛かりとなるものとする。この点については、今後、検証授業を伴った実践研究を実施していきたい。

**【引用・参考文献】**

- 明道春奈（2015）「音楽づくりにおける<環境と制約>の適切性についての実践的研究：小学校2年生におけるヴォイス・アンサンブルづくりの授業実践を通して」『学校音楽教育研究 19(0)』 pp.172-173.
- 木村充子（2011）「音楽づくりの活動における創造性と制約：保育者養成課程の授業実践事例を通して」『桜美林論考. 人文研究 (2)』 pp.153-165.
- 齋藤亜矢（2017）「自由と不自由」『図書 2017年11月号』岩波書店 pp.46-49.
- 津田正之「『音楽づくり』の授業の充実」『初等教育資料2011年9月号 (No.877)』 pp.50-53.
- 坪能由紀子（2018）「第4章 音楽づくりの学習と指導 1. 「音楽づくり」の意義と留意点」『最新初等科音楽教育法』音楽之友社 pp.83-84.
- 矢吹雄介（2015）「小学校音楽科における音楽づくりの実践的研究：協同学習による音楽的コミュニケーションを通して」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集 (18)』 pp.25-34.

